

Fr. Kafka の長編 „*Der Verschollene*“ („*Amerika*“) について

— 4、5、6章における構造的な対立要素

山 尾 涼

1.

Fr. Kafkaの長編小説である„*Der Verschollene*“ (『失踪者』) は、„*Der Proceß*“ (『審判』), „*Das Schloß*“ (『城』) からなる彼の3つの長編小説の中で最も初期に書かれた作品である。Kafkaは1912年の9月に„*Das Urteil*“ (『判決』) を一気呵成に書き上げた直後、『失踪者』の第1章である„*Der Heizer*“ (『火夫』) に着手して、同年の1月には作品の第6章までを完成させた。実際には1911年の冬にKafkaは『失踪者』の包括的な最初の200頁の原稿を書いているのだが、これは今日では失われているといわれている。順調な仕上がりをみせた6章までの章には、いずれも作者自身によって章題が付けられている。その後第7章、すなわちMax Brod版 „*Amerika*“ (『アメリカ』) の „*Ein Asyl*“ (「隠れ家」) に当たる部分は、途中 „*Die Verwandlung*“ (『変身』) の執筆によって中断されて、完成したのは翌年の1月であるとされている。この章の成立以降、『失踪者』の執筆は完全に中断されて、再びKafkaが執筆に着手するのは1914年の夏以降のこととなる。そしてこの未完の長編小説における、今日一応の最終章とされている断片が永久に途切れたのは、1914年の10月であると考えられている¹。

本論は以前に拙稿で行った『失踪者』の1、2、3章における作品に構造的な対立要素の作品解釈の延長線上に、続編として置かれるものである。そこではH. Binderの指摘²に従い、作者によって一息に書かれた6章までを1、2、3章と4、5、6章の2つに分けることとして、その最初の部分である1、2、3章における対立要素の考察を行った。そして本論では、次の4、5、6章に解釈の焦点を絞り込み、作品全体を貫いている主人公の保護と追放を構成する対立の要素

について、引き続き考察を行うことを目的としている。

2.

作品の3章において伯父の家を追放された主人公カールが4章で初めて出会う人物は、フランス人のドラマルシュとアイルランド人のロビンソンであり、2人はいずれも失業中の錠前工である。カールの同伴者となる彼らは、伯父の代わりに新たな保護者にカールを引き合わせるという点において、1章の登場人物であった火夫が果たした役割と一致する。しかしカールが火夫に共感を抱いたのに比べて、ドラマルシュとロビンソンの2人には苛立ちを感じ、反抗心を抱く。カールが火夫に共感したのは、彼らの主観的で幼稚な性格と、不当に裁かれたもの同士という状況が一致していたからであると解釈できる³のだが、ドラマルシュ達に不快感を感じたのは彼らが異なる要素から形成された人間であるからだと考えられる。

ポランダー氏の屋敷を追い出された後、カールがまず考えなければならないことは今後就くべき仕事のことであるはずなのだが、彼は両親の写真を取り出し、思い出に浸るという空想的で幼稚な要素をみせる。カールは現実を客観的な視点から捉えることも、そしてその判断に基づく冷静な行動を取ることもできないのである。このような彼の幼稚な要素は、故郷の両親の写真にこだわるという振る舞いだけではなく、世慣れたドラマルシュ達の言葉を信用しないという点にも現れている。カールの伯父の会社に就職の勧誘を受けた際にドラマルシュは、「このような方法で人を勧誘するのは卑劣な詐欺であり、ヤーコプの会社は合衆国中で、いかがわしいと噂されている」(142)と主張する。そのドラマルシュの指摘をカールは頑として聞き入れず、心の内でドラマルシュを否定し、自らの根拠のない認識の正当性を確信し続けるのである。またマックの父親の元で働く労働者達がストライキを起こしていることを街の噂から知った時もカールは、「事情を知らない悪意ある人々の噂話」(147)であるとして信じない。カールは作品の1章でも火夫の話を妄信して自分の考えと真実を照らし合わせることをしなかったのだが、この章でもカールは物事に対して正しい認識を持つことを拒むのである。カールは伯父の会社の詳しい内情や、ましてマックの会社のことなど全く知らな

いはずなので、彼の考えは間違っていることになる。後に、このような彼の性格上の主観的で幼稚な要素は、ホテル・オクシデンタルからの追放という窮地を引き起こす引き金となる。

カールとは反対に、ドラマルシュとロビンソンは徹底した現実主義者である。彼らは常に状況を冷静に把握し、自分達が有利になるように的確に行動することができる。カールの視線は常に自らの内側に向いており、彼の視界には「濃くて黄色い朝霧」(139)が掛かって周囲の物事をはっきりと見るができない。それに比べてドラマルシュとロビンソンの視界は外側に向いており、カールよりアメリカの景色の「多くのを明らかに見ていた」(144f.)と描写されている。このように、主観的で幼稚なカールと、客観的な判断ができて世慣れた2人の労働者達は、正反対の要素から構成された人間であることが理解される。彼らの性格上の対立する要素は、ドラマルシュ達に対するカールの不満、そして決別へと発展する。

火夫との出会いとは逆にドラマルシュ達たちに対して初めから反発を抱きつつも、彼らの提案によってホテル・オクシデンタルへと向かったカールは、そこで彼の新しい保護者となるコック長という女性に出会う。コック長は食べ物を買って来た「カールの手を握って」(156)、新鮮な食べ物が保管されている貯蔵庫に入っていく。コック長はカールとの出会いの場面から、彼に無条件の好意を示して優遇する。コック長の示す同情的な優しさと、これまでも保護者との出会いの場面では肉体的な接触が描かれていたことを考えると、彼女が一種の母親像を伴う保護者の役割を持つ人物として登場していることは明らかであり、このことはすでにW. Sokel⁴やH. Politzer⁵、R. Nicolai⁶などによっても指摘されている。保護者がカールに与える影響は、アメリカの地に1人で彷徨うことになっても未だ故郷の両親から完全に自立することのできない彼にとって実に大きく、コック長との出会いは彼に心理的な変化を生じせしめることとなる。カールはドラマルシュ達と仲間であることが、恥ずかしいことであると感じるようになるのである。そのことは、カールはドラマルシュ達をコック長に向かって「仲間」(159)であると言うのだが、内心では「この仲間たちが〔ホテルに泊まれという申し出を受けるには〕とにかく邪魔者なのだ」(ebd.)と考えるようになる所から読み取る

ことができる。

ドラマルシュが言うところの「後ろ盾」(164)を得たカールは、それまで言いなりにになっていたドラマルシュに対し、はっきりと不満と怒りをぶつけることができるようになる。これは、これまで両親の写真に頬を乗せて寝るなどして、自立できない有様を呈していたカールにとって、保護者との出会いがドラマルシュの言葉どおり彼に力を与えたのだと解釈できる。だがカールはドラマルシュ達にトランクを空けられたことで両親の写真が無くなったことにこだわり続ける。カールはかつては伯父と、そしてこの章においてコック長という2人の人物に出会ったことによって、アメリカにおける彼の父母のような役割を果たす人物に巡り合えたにも関わらず、故郷の両親に固執するのである。新しい父母に出会えた後にも、故郷の両親から離れきれない彼の執着は、はっきりとした母性愛を示すコック長への密かな裏切りであると判断できる。以前もカールは保護者である伯父の教えに反発を感じて、彼の父性的な教えを裏切り続けていたが、ここでも類似した状況の一致を見出せるのである。

3.

C. Schärfは『失踪者』に関する論文の中で、「Kafkaは資本主義体制を、〔…〕ただ社会批判的な見地から観察した訳ではなく、人間全体とその社会との関係の疎外の形式として観察したのである」⁷と述べている。そしてKafkaの想像したアメリカには、作者が執筆していた当時にはほのかに兆候として現れるだけであった「発展の絶頂に至る傾向が含まれている」⁸として、その傾向とは、「純粋な利益至上主義を意図する経済至上主義を目指す、全社会的な形の崩壊と消滅の傾向である」⁹と説明している。Kafkaは作品の4、5、6章において、資本主義的な社会の中で生きるために労働を免れることのできない、いわゆる中流階級の人間が、どのような存在であるかを描き出そうと試みたのではないだろうか。だがそのKafkaの描き方からは、非常に極端な人間存在のあり方を読み取ることができるのである。例えば風景描写の目立つ4章では、「不安を感じることなく屠殺場に運ばれていく家畜の鳴き声」(140)と、交通秩序に完璧に従うニューヨーク市民の様子が並んで描写されているのだが、そこでは画一化された市民生活と、屠殺

されるのを待つだけの家畜の運命は重なり合っており、市民の存在に対する侮蔑を感じ取ることができる。また、利益至上主義的な資本主義社会の姿が、小説内で最も先鋭化して現れているのが、カールがエレベーターボーイとして働くホテル・オクシデンタルの内部である。

ホテル・オクシデンタルは、厳格な就業規則によって従業員たちを拘束して、会社の利益を非情なまでに追求する組織である。そして利益追求の影には、様々な犠牲が生じている。カールがエレベーターボーイの職に就いたせいで、同僚のジャコモは格下の職へと追いやられる。コック長も例外ではなく、過去に苦労して以来不眠症を患っており、1、2時間の睡眠時間で働いている。テレゼが母を犠牲にして生き延びることができたように、競争と不安を避けて生きることのできない彼らは自らを犠牲にして生きなければならないのだ。

企業という巨大な集団の中で労働を強いられる人間は、利潤を追求する機械の中の小さな歯車の1つに過ぎず、企業は彼らが自由な意思や決定に従って生きることを許さない。それはカールがホテル内でテレゼやコック長の仕事を手伝ったり、要求されていないことまで実行していたことが、彼がクビになる際に全く考慮されなかった点に表れている。ホテルはカールに対して、会社の要求していないことまで行って貢献することよりも、服務規程に従って働くことだけを望んでいたのである。言い換えれば、自分で判断して行動する労働者よりも、取替え可能な部品としてあることを個人に要求していたのだと解釈できる。しかしカールはホテルの要求を察することができず、自らの勤勉な働き振りに対して自己満足に浸り、自分には将来の見通しがあると考え仲間を軽蔑していた。だが実際には彼が完全に忘れていた服務規程に従って働かなくてはならなかったのだ。カールはここで再び幼稚な要素によって思い上がり、空想に浸っていたのだと指摘することができ、ホテル内での現実と、カールの幼稚な要素は対立していると考えられる。これが後にホテルからの追放の要因となるのである。

個人の部品化しようとするホテルの望みは、エレベーターボーイに制服を着せることから読み取ることができる。制服はある一定の規律に帰属している集団が身に着けるものであり、個人を画一化させる道具であるといえよう。エレベーターボーイの制服は、「見た目は非常にきらびやか」(184)だが、カールは「それ

を試着した際にぞっとする」(185)。10着もある制服のどれもが彼には合わず、上着をリフォームしてもなおきついで、「未だ呼吸ができるのかどうか」(ebd.) 確かめたくなり、「かなり窮屈な上着が再三深呼吸へと促した」(ebd.)。個人を無個性化する作用を持つ制服は、文字通り彼を締め付けて圧迫感を与えるのだが、これは彼がホテルに同化できないことを示しているのだと解釈できる。カールの個性の持つ幼稚さ、空想性といった諸要素は、個人が無個性であることを望むホテルと対立している。繰り返して述べている通り、ホテルは個人を巨大な組織に組み込まれた部品として、その人が生み出しうる利益を可能な限り絞り尽くす。この運営方法はなにもオクシデンタル・ホテルに限ったことではなく、Schärfも指摘していた通り、Kafkaの想像したアメリカの資本主義社会全体にいえることであり、2章で描かれた伯父の会社も例外ではない。そこで人間が本来的な生を生きられる可能性は無に等しく、次第に個人は個人としての特性を失っていくこととなり、最終的には家畜と並んで描写されるような名前のない市民の一部に組み込まれてしまう。

ホテルによる従業員の非人間化の影響は、6章に描写される門衛室にも強烈に表れている。忙しい門衛室にはたった2人しか案内人が配置されておらず、各人への負担は非常に重い。案内人達の業務処理の迅速さは、もはや人間業ではないかのように描かれており、その上余りに緊張を要する仕事であるから、「1時間以上も耐えることができる人間はほとんどいない」(236)。またホテル内には探偵がいて、従業員は絶えずその仕事振りを監視されている。そのせいで彼らは人間不信に陥っており、このような場所に人間らしい付き合いは成立し得ないのではないだろうか。ホテルは自らの利益の為に、徹底的ともいえるやり方で従業員たちの非人間化を促す。しかしカールはホテルと対立を深めて、規則に組み込まれることを拒むことによって、すべては無意識の内にだが、自らの個性を守ったのだとも解釈できる。伯父との対立を引き起こしたのは、カールの個性を伯父の主張するアメリカの規律に押し込めようとしたことが一因であった。カールは個性によって対立を引き起こし、そしてまた個性によって追放されてきたのだが、ホテルにおいてもカールの個性の中の幼稚さ、空想性といった諸要素が対立を引き起こす。カールの個性はアメリカの資本主義社会に適應できるようなものでは

なく、そもそもホテルや伯父の会社に具現されるそのような社会は個人が企業の不利益になるような個性を持つことを許さないのだ。カールとホテルとの対立から読み取ることのできるKafkaが考えた資本主義社会のあり方と個人の関係とは、以上のようなものであると推測する。

そしてオクシデンタル・ホテルの具現として登場するのが、門衛長である。伯父の元からの追放の場面では、グリーン氏がカールの敵として登場した。6章では門衛長がカールに対して強い敵意を示す新たな「敵」(237, 259)として現れる。カールは門衛長の敵意の理由を「2人の男が自分を訪ねてきて、写真かなにかを残していないか」(228)と、くどくどしく尋ねたためではないかと推測する。この写真がカールの両親の写真のことであるのは明白である。また門衛長自身は、カールが彼に挨拶をしないことを怒りの原因として述べている。カールが大胆な態度で門衛長に接したことと、会う度に挨拶をしなかったことの2つの理由で怒っているにしては、門衛長の怒りは余りにも激しいといえる。門衛長は自らを、ホテルにおける「すべての頂点にある」(262)ようなものだと位置付けており、そのため「すべての従業員は、彼の命令を無条件に聞く義務がある」(ebd.)のだと断言している。門衛長は、ホテルの厳しさの権化として表れて、規律をないがしろにしたり、ホテル内の非人間化に対して無意識ながら、故郷の両親に固執し人間性を保持し続けたカールを私刑に処したと解釈することができるのではないだろうか。ホテル・オクシデンタルは、厳しい序列と規律によって成り立つ組織であり、その内部は、例えばボーイ長とカールの関係のように支配する側とされる側に明確に分かれている。その中において序列を維持するための挨拶は省かれて良いものではなく、だとすると門衛長が挨拶に並々ならぬ執着を示した理由も、彼がホテルの具現であるとすれば理解されうる。

4.

コック長がカールにとって母親の役割を持つ人物であるとしたら、テレゼは姉のような役割を持っていると考えることができる。テキストの2章において、カールの保護者であった伯父は、彼の生活を保証してやると同時に、アメリカでの生活を教える教育者であった。5章では、コック長が彼の身元引受人となり、

テレゼが彼を教育する。2章で伯父が果たした保護者兼教育者という役割を、5章ではコック長とテレゼの2人が分担しているのである。しかし以前カールが伯父の教えに対して反抗心を抱いていたのと同じく、この章でも教育者であるテレゼに対する反発を読み取ることができる。

まず、商業用通信文の勉強をテレゼに添削してもらう際にカールの反抗心は表れる。両者とも自分の回答が正しいとして譲らずに2人の意見は衝突するのだが、コック長は常にテレゼの回答を支持するという場面がある。カールはコック長の判断を、テレゼの回答が正しいからではなく、「テレゼが彼女の秘書だから」(204)肩を持つのだと考えて、彼女らの意見を受け入れない。この反発の原因はまたしても、根拠のない、主観的な考えに固執するカールの幼稚な要素から生まれているといえる。

またカールは、ドラマルシュを警戒して、彼と口を利かないようにというテレゼとの約束を、ロビンソンの登場時に容易く破ってしまう。テレゼの警告は、伯父がポランダー氏とカールが懇意になることを良く思わなかったことと一致している。テレゼと伯父という2人の教育者は、カールの為にならない人物を的確に見極めて、その危険について追放の起こる前に仄めかしているのである。2章において、もし伯父の忠告に従っていれば、カールの追放は起こりえなかった。今回もテレゼの意見に従ってドラマルシュの使いにやってきたロビンソンを無視していたら、追放を免れたのではないだろうか。このように6章でのホテルからの追放は、外面的にはいかにも不条理な決定の元に行われたような様相を呈しているが、実際にはカールと教育者との水面下での対立や、カールの個性とホテルとの対立などの要素が重なった結果、ごく自然な成り行きで生じたのだと推察される。

門衛長と、カールの直属の上司であるボーイ長がカールを尋問する場面でも、一読するとまるでカールは上司らに不正に裁かれているかのような印象を受けるのだが、実は至って公正な裁きであったといえるのではないか。確かにロビンソン事件において、真実と疑いは複雑に交錯しあっている。ボーイ長はカールがロビンソンの悪事に加担したとして、カールを追及するが、カールは容疑を否認し続ける。ロビンソン事件に対する両者の意見は真っ向から対立しているが、しか

しどちらの意見も正しいのだと考えることができる。カールのたどたどしく曖昧な自己弁護と、ロビンソンという現にそこにいる証拠人物からでは、ボーイ長がカールの身に起こった真実を把握するのは難しく、状況のみから判断した場合ボーイ長の判断は間違っていない。それに対して、カールも嘘は一言も言わず、そのためにかえって事情が伝わりにくくなっているだけで、彼が述べたことも全く真実なのである。しかし『失踪者』では信じる人間の多い意見が、たとえそれが真実でなかったとしても、真実として成り立ってしまうのである。そのためにカールが実際には不正を行っていなかったとしても、彼の意見を誰も信じなかったならそれは嘘として扱われてしまうという物語内の傾向を読み取ることが可能である。

ロビンソン事件の、誰にも自分の話を信じてもらえないというカールにとって絶体絶命の場面で、事の真偽を確かめるためにテレーゼとコック長が現れる。門衛長はボーイ長の意見を全面的に信頼している。そしてテレーゼも日頃の好意からカールの無実を信じている。寄せられる信頼の多い意見が、真実として扱われるという傾向から、残されたコック長の信頼を得た者の意見が正しいということになるのだと考えられる。ボーイ長とカールのどちらか、コック長の信頼を勝ち得た方がこの裁判の勝利者となりうる可能性があるのである。ボーイ長はコック長を「愛して」(236)おり、コック長も彼の行為を受け入れている様子は、彼らの様々な振れ合いとお互いの強固な信頼から理解されうる。ボーイ長とコック長の関係は、異性間の愛情によって成り立っているといえる。それに対してカールとコック長の関係は、彼女の母性愛からなる親子のような関係である。ボーイ長とカールは、コック長の信頼を巡って対立する。このロビンソン事件究明の場面において、母性愛と異性愛の対立を見出すことができるのである。

事務所に入ってきた当初、コック長はカールのことを「完全に信頼している」(238)。だがボーイ長が「コック長の後ろにぴったりと寄り添い、[...]襟をゆっくりと」(242)直すという行動をとった後には、コック長はカールに対して否定的な態度をとるようになる。しかしカールはコック長がボーイ長に加担し始めたことに動揺を感じず、自分の起こした不祥事の究明をひとつとのように傍観する。カールは自ら弁明することを放棄して、コック長の母性愛によって無条件に救わ

れることを期待するのである。コック長の母性愛によって何もせずとも事態は好転するだろうというカールの考えは、彼の幼稚な要素に基づく空想であり、コック長自身によって覆される。この場面はかつて空想に囚われて火夫を助けられなかった状況との一致を見出せる。カールの空想に反して、コック長は「ボーイ長は〔…〕もっとも尊敬できる人間であり、その人があなたの罪を明確に断言したことは、無論反論できない」(248)と述べる。最終的にコック長はボーイ長を信頼することを選び、母性愛は異性愛の前に敗れ去るのである。

母性愛と異性愛が対立するとき、異性愛を前にして主人公は無力になるという構造は、『変身』の2章の終わりの場面からも読み取れる。部屋を出てきたグレゴールに父親がリンゴを投げて攻撃する場面は、母親を巡る父と子の争いの場面であると読みとれる可能性を秘めているのだが、そこで母親は父親に「駆け寄ると、父親を抱きしめて、彼と完全に1つになったかのようになる」¹⁰という描写がある。これは夫婦間の異性愛が、息子との母性愛に勝利したことを示す場面であると解釈することができる。このような異性愛の勝利を示すような行動は、『失踪者』にも見出せる。コック長がカールを信じなかったことにより、テレゼもカールに掛けられた疑惑が真実かどうか重要視しなくなる。こうしてロビンソン事件は真相究明されないまま、ボーイ長の判断が正しいこととして、皆に認識される結果に終わる。ボーイ長によって解雇を言い渡された後、カールは「ボーイ長が、コック長の手をこっそりと握って弄んでいる」(253)所を見ながら無言で立ち去っていく。これも『変身』の場合と同じく、異性愛の勝利を敗北者に誇示する行動であるといえる。このような異性愛と母性愛の対立は、一種のエディプス・コンプレックスに基づいているのではないかという考察を進めることもできるが、本論の『失踪者』の構造を指摘するという目的から逸れてしまうために、今回は控えておくことにする。

カールが生まれて初めて就いた職がエレベーター・ボーイであることは、彼のアメリカにおける運命と奇妙な一致を示している。エレベーターは、絶えず上昇と下降という上下運動を繰り返す。カールはトランクと傘だけを持って、1人でアメリカの地にやってきて、裕福な伯父に見出され、あてのない移民の身から一気に上院議員の甥という身分に上昇した。その後突然勘当されて、再び移民へと

下降し、労働者となる。だがその身分からもすぐに追放されて、再度職も後ろ盾もない移民となるのである。伯父との関係は、血の繋がりによる従属の関係であり、それは上流階級におけるものであった。4、5、6章におけるオクシデンタル・ホテルとカールとの関係は資本主義的な従属の関係であり、彼の環境は中産階級的な市民生活へと移ったのだといえる。そして後の章では、カールはブルネルダによる性的な従属関係を強いられ、奴隷の身分へと落ちぶれていくのである。エレベーターが上昇と下降しかしないように、カールもまた社会的な身分の上昇、下降を繰り返していくのである。

* 使用テキスト Franz Kafka: *Der Verschollene*. Schriften Tagebücher Briefe. Kritische Ausgabe. (Hrsg. v. Jürgen Born u. a.) Frankfurt a. M. (S. Fischer) 1983. 本文中の引用の後括弧内に記した数字は、このテキストからのページ数を示す。

なお本稿は、2003年に南山大学大学院文学研究科に提出した修士論文の内容に加筆、修正を加えたものである。

- 1 Hartmut Binder: *Kafka Kommentar*. München (Winkler Verlag) 2. Aufl., 1976, S. 73-160.
- 2 Binderはこの小説の6章までを大きく分けて1、2、3章と4、5、6章の2つのまとまりに分けることができるとし、なぜならその2つのまとまりには、カールが保護者と出会い保護された後に、その生活の場から追放されるという物語の筋の一致を読み取ることが可能であるからだと説明している。a. a. O., S. 60, 67
- 3 拙稿「Fr. Kafkaの長編 „Der Verschollene“ („Amerika“) について -作品に構造的な〈対立〉要素」、『-南山ゲルマニスティック- 光環 (CORONA)』第14号、2002年、23頁参照
- 4 Vgl. Walter H. Sokel: *Franz Kafka-Tragik und Ironie zur Struktur seiner Kunst*. München Wien. (Albert Langen Georg Müller Verlag), 1964, S. 329.
- 5 Vgl. Heinz Politzer: *Franz Kafka, der Künstler*. Frankfurt a. M. (S. Fischer Verlag), 1965, S. 212.
- 6 Vgl. Ralf R. Nicolai: *Kafkas Amerika-Roman „Der Verschollene“ Motive und Gestalten*. Würzburg (Königshausen und Neumann Verlag) 2. Aufl., 1986, S. 155.
- 7 Cristian Schärf: *Franz Kafka Poetischer Text und heilige Schrift*. Göttingen

(Vandenhoeck und Ruprecht Verlag), 2000, S. 71.

8 ebd.

9 ebd.

10 Franz Kafka: *Die Verwandlung*. Mit einem Kommentar von Vladmir Nabokov. Frankfurt a. M. (Fischer Taschenbuch Verlag) 15. Aufl., 1999, S. 50.

(やまお りょう ドイツ文学)